

生活保護受給有子世帯の親子関係と子育て課題の現状

— A県における生活保護受給有子世帯へのインタビュー調査結果から親子の関係を中心に—

○ 東海大学 小林 理 (3505)

岡部 卓 (首都大学東京・1899)

キーワード：生活保護受給有子世帯、親子関係の実態、子ども家庭支援

1. 研究目的

生活保護受給世帯（以下、被保護世帯と略す）が、保護を活用しながら、生活基盤を確保・改善し、自律・自立へと向かうためには、いかなる支援が求められるか。被保護世帯の実態と支援課題の把握は、常に各自治体の生活保護行政運用の重要な課題となってきた。特に被保護世帯の子どもへの支援は、子どもの現在の生活と成長だけでなく、将来の生活や人生設計の確保を図る上で必要不可欠であり、そのためにも各自治体は、さまざまな取り組みと実施体制の工夫が求められている。

このような関心で、本研究は、A県で創設された生活保護受給有子世帯への子どもの健全育成プログラム及び子ども支援員プログラムの策定事業に携わっている。そこで、生活保護受給有子世帯の基本属性把握のため、生活保護ケースファイルから抽出したデータから生活基盤の状況を中心に、日本社会福祉学会第59回大会（淑徳大学2011年）で口頭報告を行った。さらに保護者が、子育てや子どもの状況にいかなる考えをもち、課題を抱えるかを把握するアンケート調査を実施し、世帯主の子育てや子どもの生活状況の視点を中心に、日本社会福祉学会第60回大会（関西学院大学2012年）で口頭報告を行った。

本研究では、前回のアンケート調査結果をふまえ、有子世帯の世帯主が、子育てや子どもの生活の現状にいかなる考えをもち、どのような課題を抱えているのかを明らかにすることを目的として、当事者を対象にインタビュー調査を実施した。今回の報告では、調査結果の中でも、子どもに対する思い、子どもの悩みや気がかりなこと、子どもの卒業後の進路等に関する分析中心に取り上げることにする。

2. 研究の視点および方法

本報告は、A県所管の被保護世帯、とりわけ有子世帯を対象にインタビュー調査を実施した結果を取り上げる。調査は、A県における生活保護受給者の世帯の状況、特に世帯主の生育歴、子どもとの関係性、子どもの就学や進学等の考え方を把握することを目的とした。対象は、2011年6月現在時点のA県所管域（町村域）における被保護世帯のうち、子ども（0～18歳：高校就学年齢まで）と同居している世帯のうち、福祉事務所の協力で世帯類型ごとに一割程度を抽出し、事前に電話連絡と郵送により調査内容等を伝え協力の打診を行い、調査協力への同意が得られた世帯（24世帯）へ実施した（有効回答21世帯）。調査期間は、2011年9月から11月、一世帯の聞き取り時間は2・3時間程度であった。聞き取りは、子どもの学校生活について、子どもに対して、養育者（世帯主）自身についての項目で半構造化面接法により質問し、得られた回答について逐語録を作成した。

3. 倫理的配慮

調査は、次の事項を事前に説明し、同意を得た。A県の生活保護受給有子世帯への子どもの健全育成プログラム及び子ども支援員プログラムの策定に資するべく実態を把握し、支援ニーズを明らかにすることを調査研究の目的とすること。調査結果は、匿名で入力、処理し、個人が特定されないよう報告にまとめること、を事前に書面で伝え、同意書を回収した。さらに、調査の実施主体は、あくまでも回答者の自由意志を尊重し、生活保護の実施機関により生じる強制力を避けるために、調査主体を調査事業に携わる研究会事務局（首都大学東京 岡部卓、西村貴直、および東海大学 小林理）とした。

4. 研究結果

【基本属性】世帯主の年齢は、33歳から78歳（平均48.8歳、子の父母死別により祖母が養育するケースや、母子で同居するが世帯主が祖母のケースを含む）であり、女性14名、男性7名であった。世帯類型は、母子世帯11世帯、父子世帯3世帯、両親世帯4世帯、その他世帯3世帯（父子と祖父世帯、母子と祖母世帯、祖父母と孫世帯）であった。同居する子どもは、小学校2年から高校3年であり、子どもの数は1名が12世帯、2名が6世帯、3名が4世帯（19歳以上が同居するケースもあるが数には含まず）であった。

【養育者の生育歴】養育者の生育歴についての回答では、4ケースで離婚の経験があり、1ケースは未婚、2ケースで死別が経験されていた。さらに2ケースで虐待の被害、1ケースは親と別居し児童養護施設で暮らした経験があった。また、育った家庭が「暗い雰囲気」、「（兄弟が多く）親の愛情的なことは私自身（経験が）なかった」、「親と一緒に過ごす時間が少ない」「両親とも厳しい」家庭だった、親戚に預けられたが「イヤになり」小学6年でひとり暮らし、といった回答があった。3ケースで養育者自身に高校や大学の中退の経験、1ケースで学校に通えなかった時期があった。

【親子関係のとり方】親子関係をどのようにとっているかについては、「よく話をする」といった関係の良さを表す回答が5ケースでみられ、1ケースで家族一緒に食事をとることを大事にしていた。3ケースで、学校の配布物やテスト等を確認したり、宿題や勉強を一緒にに行ったりしていた。

【子どもの教育や将来】子どもの教育や将来の進路については、「子どもの実力でできることを」や、「子どもの希望を尊重したい」、「普通程度には勉強ができるようになってほしい」といった回答があった。また「高校卒業程度は」「高校だけは卒業してほしい」といった回答があった。

5. 考察

養育者の生育歴からは、親族関係の支援が得られにくい状況がみられた。親子関係は、会話を中心とする関係が目立つ。また将来を子どもの意向に委ねるといった漠然とした見方がある一方で、高校「までは」といった具体的な目標をたてる見方もあり、保護者の教育や学歴観は、対照的な特徴をもつ状況がみられた。